国　境

浅　原　義　雄

短期大学部閉学にともなって茗荷谷校舎から、新座校舎に移って半年以上が過ぎた。三分間隔の丸の内線から、平日の昼間は十二分間隔の武蔵野線ダイヤにもやっとリズムがつかめるようになってきた。自宅から南武線に乗って府中本町で乗り換える武蔵野線は、東西南北と新の字がつく駅名が多いことに、乗り始めの頃は驚かされた。浦和にいたってはご丁寧にも西・南だけでは足りず武蔵までついている。

座のつくもので銀座・歌舞伎座の名は身近であったが、新座は最初のうちは聞き慣れず、些か違和感を覚えたのも事実である。慣れとは恐ろしいもので、最近はやっとその名に抵抗感が薄らいできたようだ。もっとも新座という名に馴染みがなかったのはこちらの不勉強で、角川日本地名大辞典によれば「武蔵国の郡名。新羅郡が転化して新座郡になったとされる」とあるから、相当古い由緒ある地名ということになる。

志木駅から大学に向かう西武バスに乗ると、野火止、大和田、英橋等のバス停名がある。これらの名も歴史好きの人間にはたまらな

い魅力を感じるであろう。「野火止」と車内のアナウンスを聞いただけで、大学へ行くのをやめて平林寺まで散策したくなる気分にふと襲われてしまう。大学構内に古墳塚の碑があるくらいだから、この周辺は歴史の宝庫ともいうべき場所で、その気になって探せば思いがけない発見がいくらでもありそうだ。

地名といえば、長年脳裏から離れなかった東海道中の武蔵の国と相模の国の国境を最近やっと探し当てた。この国境に関心を持つようになったのは、東海道中で三島だけが駿河の国でなく伊豆の国になっていることに、ある日ふと気づいたからである。三島は西伊豆方面の観光の起点になっているのだし、よく考えてみれば伊豆の国になっていて何の不思議もないわけだ。ただ自分勝手に駿河の国と思いこんでいただけの話である。

東海道五十三次は、お江戸日本橋を七つ立ちして山城の国三条大橋に辿り着くまで、武蔵、相模、伊豆、駿河、遠江、三河、尾張、伊勢、近江と九つの国を通過する。現代人の感覚だと品川宿だけが武蔵の国で、多摩川を渡った川崎宿からは相模の国に変わると一瞬錯覚を起こしそうだが、武蔵の国は程ヶ谷までで相模の国は戸塚宿からである。正月の箱根駅伝で有名な権太坂を登り切ったあたりに、武蔵の国と相模の国の国境があった。さらに近くには国境の目印となったとおぼしき「境木地蔵尊」まである。これまで頭に引っかかっていた場所が見つかって、宝物でも見つけたように嬉しくなった。

武蔵野線は東京と千葉の間を、昔風にいえば武蔵の国と下総の国を結んで、文字通り武蔵国の野を走っているわけだ。車内の路線図から判断すると、三郷駅と南流山駅の間あたりが、武蔵と下総の国境になるのだろうか。定年になるまでには、その国境を探し訪ねてみたい。